

図書館長からのメッセージ

新入生の皆さん、ご入学おめでとう。

期待に胸ふくらませて明治大学に入学された皆様に、一言申し上げたいことは、大学生活の中で、よき師、よき友との巡り合いとともに、良き書にも巡り合ってほしいということです。そのためには、図書館利用を生活の一部としてみてください。明治大学図書館は、皆さんの学習や研究を支援するために220万冊の資料と、多数のデータベース、電子ジャーナルなどの電子化資料、さらに様々な施設・設備を備え、そして年間330日以上開館していますから、きっとご期待に応えられることでしょう。図書館を使いこなし、充実した学生生活をおくられるよう願っています。



明治大学図書館長 吉田 正彦

3館 合わせた蔵書
220 総冊数
万冊

各館の蔵書にはそれぞれ特色があるので、利用目的に応じて使い分けて積極的に利用するのがお勧めです。

用途に合わせてカシコク使おう！

和泉 図書館

特色 人文・社会科学の
入門書・基本図書
蔵書数 33万冊
最寄駅 明大前(京王・井の頭線)



日・祝はCLOSE

中央 図書館

特色 人文・社会科学の
基本・専門図書
蔵書数 147万冊
最寄駅 御茶ノ水(JR)



日・祝もOPEN

生田 図書館

特色 自然科学・理工学
農学の基本・専門図書
蔵書数 40万冊
最寄駅 生田(小田急線)



日・祝もOPEN

「読む経験」へ

文学部 専任講師 伊藤 氏貴

員としてこんなことを言うはどうかとは思います
が、ぼくは大学にはたぶん三〇〇日くらいしかいませんでした。四年間をつうじてです。もっと正確に言えば、行くだけは行っていたのですが、あまり授業に出ていなかったのです。毎年、興味の持てる二、三の授業を除いて、他はさぼれるだけさぼっていました。それでも四年間で単位を落としたのは発表をさぼった演習一つだけでしたから、いまよりよほど「ゆとり」のある時代だったのかもしれません。

「ひきこもり」ということばも実体もまだないころでしたから、親の手前もあってとりあえず毎朝家は出る。でも行き先はたいてい映画館か図書館でした。名画座というのが都内にいくつもあって、古い映画を、学生なら三本七百円で観られました。ですが三本たてづづけに観ると翌日にはごっちゃになつてわけがわからなくなる。それでいつからか映画を観ながらノートをとるようになりました。もちろん暗い映画館の中ですから字はぐちゃぐちゃですが、それでもずいぶん記憶の助けになりました。

といって毎日映画館に通うお金もあるはずもなく、他の日はほとんど図書館です。閲覧室よりも書庫の隅にばつぱつんと置かれた席で一日をつぶすことが多く、じぶんではちょっと手の出ない高価な本をじっくり読み、ここでもノートをとりました。買えない本だからこそ真剣に読んだので、貧乏学生でよかったと今では思えます。

難しい本に飽きてきたら画集・写真集や雑誌で気分転換をする。ガウアインの写真集で行ったこともないハルセロナに想いを馳せ、その土地を契機にカザルスとピカソというふたりのパブロに出逢う。インターネットのない時代、図書館は世界の至るところに通ずる「窓」でした。しかしその夢想の「窓」を大きく開け広げるには、明るい閲覧室よりも薄暗い書庫の方がふさわしかったと思います。駿河台の図書館は立派すぎ明るすぎて、そこだけが少し不満です。

映画館に書庫、と暗いところばかり好んで、学生時代そのものもさぞかし暗かったのだろうと思われるかもしれません。が、さにあらず、芝居もあり映画も作りバンドも組んで、稽古帰りにまた本番の打ち上げにと夜な夜な呑みに出歩いては、目を覚ませば路上だつたりともかく忙しい毎日でした。

そんなじぶんを見失ってしまいそうなほど慌ただしいなかで、「このままではまずい」と思うこともありました、「とにかく一本、背骨を通さないと」と。そして考えたのが次のふたつのことです。

ひとつは、なにを選択するか。観たい聽到みたい読みたいもののが多すぎて、ともかく時間がない。ですから、「何十

年後にもこれを選んでよかつたと思えるだろうものだけに手を出そう」と決めました。「体験でなく経験を」と言いかえてもいいかもしれません。いくら楽しくてもその瞬間に終わってしまう「体験」ではなく、じぶんのなかに降り積もってあとでそれを活かせる「経験」となるものを見きわめよう、と。たえてみれば、マクドナルドに十回行く分を我慢して、高級なレストランで一回い出に残る食事をしようということです。

もうひとつは、その「経験」をできるだけはっきりした「ことば」にしようということでした。それは「体験」を「経験」にするために必要な作業です。たんに「好き」というのではなく、なぜ好きなのかを、他の人にもわかるかたちで伝えること。結果的にそれが職業になってしまいました。当時はそんなつもりはなかったのですが、今では評論家としてほぼ毎月、小説や映像や漫画について、じぶんの「好き」(たまに「嫌い」)を語っています。

情報量は格段に増えています。みなさんはじぶんで以前に増して「選択」する能力を求められていると言えるでしょう。ぼくも若ければやってみたいと思ったらうような新しいことがたくさんあります。映像を作るのは、技術の進歩のおかげで信じられないほどかんたんになりました。メディアの可能性が広がったこと自体は喜ぶべきことでしょう。

ただ、ひとつ言えることは、どんな新しいメディアが出てきたとしても、それを操り享受するのは「ことば」を通してなのだ、ということです。抽象絵画のような純粋な映像でもいい限り、どんな作品でも「ストーリー」という「ことば」の世界をそこから取り去ることはできません。すべての基礎になるのは「読むこと」です。どんなにメディアが発展しようとそのことだけは決して変わりません。

四年間でできるだけたくさんの方の「読む」「経験」をしてほしいと思います。それには「ことば」の力が不可欠です。そして「ことば」の力とは、たんに語彙や情報量を増やすことではなく、じっくりと長いものを読むなかでしか培うことができません。本でも映画でも、「長さ」に挑戦してください。そしてその「経験」を他の人たちと分ちあってください。そうすればその「経験」はみなさんの一生の財産になるはずです。



ITO
Ujitaka